

子どもと衣服

幼稚園の制服

田中三保子

この四月から、長男が、三年保育の幼稚園に通うようになりました。毎朝、紺の帽子、白いブラウス、紺のサージの上下、お揃いのカバンというかっこうで出かけます。

幼稚園から息子が帰ってきますと、制服の手入れをしなくてはなりません。ブラウスは手洗いしませす。

帽子と上着にブラシをかけて汚れとほこりを払います。とくに大変なのはズボンです。一日はぎ続けているわけですから、日によってはドロドロです。汚れをもみ出し、ブラシをかけ、それでもおちないがんな汚れには、熱いお湯でしぼったタオルを使います。かくして、週末にはクリーニング店に走るようになります。こんな遊びざかり、よごしざかりの

子に、どうして制服が必要なのでしょう。なぜ私服ではいけないのでしょうか。それなら、どんなによごしても、たとえ裂けたとしても、全く問題はおこらないのに。

制服があれば、毎日何を着せるか、親が頭を悩ますことは少ないかもしれません。でも、私には、この「親が頭を悩ます」ことこそ、大事な家庭教育のひとつであって、それを放棄することは、家庭教育を放棄することに等しいという気がします。何を着せるかは、その日の気候・天候・場所・時等を考え合わせて決まるのです。そうした毎日のくり返しから、色彩感覚も養われるでしょうし、子どもの心には、例えば場所柄をわきまえた服装をすることが身についていくのではないのでしょうか。私服だと他の子と同じものを欲しがるからという主張も、理由にはならないと思います。親が子の要求をよしと思えば買えばよいし、できないのならそれを伝えるべきだからです。親の価値観、経済的状况等に見合った

生き方を子どもに伝えていくのが、大切な家庭教育であって、服装にもそれが反映されるのが自然なことでしょう。こうした反復の結果として、分をわきまえた、その人らしい生き方をする人間が育つのだと思います。

入園当初、息子は朝、制服を着るのをとてもいやがりました。そして家に帰り着くなり、全部脱いでほっとした表情を見せていたものです。でも、二ヶ月も経つと、朝はすんなり制服を着て、そのまま出かけるまで遊びます。帰っても、放っておけばそのまま遊び出すようになりました。そんな様子を見るにつけ、親は複雑な思いにかられます。かといって、親の考えだけで、わずか三歳の子に、敢えて私服を着せて送り出す勇氣はとてもおきません。かくして、出るのはため息ばかりです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)